

春来地区公民館だより

# 春来



2月

令和7年2月20日

第81号

(文責 田中篤幸)



春の足音が聞こえて・・・

第11号です。

新年1月1日に行われた  
新年交礼会の様子を紹介  
します。



## 長楽寺初詣 (1/1~3)



春来地区の皆さんにもお会いしました。  
参拝に訪れた方は、家族の健康や仕事の充実  
などを祈り、巳年の運気を上げようと釈迦如来  
像に手を合わせていました。

## トンド神事 (1/7)



正月行事が終わった後、正月道具を燃やし、  
炎とともに、見送るという「送り火」、トンド神  
事が行われました。参加者の皆さんと一緒に炎  
を見つめ、見送りました。

## 企画展、今後の予定など

### ★今後の予定★

**R6年12月～R7年3月 (休館)**

**R7年4～5月**

子どもの絵 絵画展 (予定)

松崎直樹 氏 所蔵

6～7月

先人の掘り起こし (予定)

阪本善行 氏 所蔵

8～9月 木の枝工作小学生作品展  
と切手アート展 (予定)

※7月に開催する教室の作品展

10～11月 中村光徳遺作

切り絵展 (予定)

**12月～R8年3月 (休館)**

### 「切手アート」よもやま話 (5)

《次の作品構想》

来年度、8～9月に展示予定の「木の枝工作小学生作品展と切手アート展」を実施します。展示用の「切手アート」の作品づくりに、今、取り組んでいます。

1) 人物画・・・前回よりも芸術性の高いものを作ろうと挑戦しています。今、2作品目を制作中です。良いものができそうな予感がしています。

2) 書作品とのコラボ作品・・・自作の言葉と百人一首の中で、好きな作品をベースに作成中です。今回は書体にひと工夫しました。その名前を+「一点強調体」としました。



## 春來の自然 「雪の結晶はなぜ六角形なのか」



前号の続きです。調べました。

雪は雲の中でできた氷の結晶です。雲の内部の温度が低くて上昇気流があると、雲内の水蒸気が大気中の微細な塵(ちり)などを芯として凝結し、直径0.01ミリメートルくらいの氷の結晶ができます。これを「氷晶(ひょうしょう)」といいます。

この「氷晶」は初めは球形ですが、周囲の水蒸気を取り込んで成長し、球の表面が徐々に変化していき、雪の結晶となります。その雪の結晶の基本が六角形なのです。それは、もととなる水の分子(H<sub>2</sub>O、酸素原子と水素原子)が正六角形の組み合わせを基本にして結晶を作るからです。

すなわち、その形が氷の分子配列にとって、もっとも安定した形ということです。

この説明を聞いて、高校時代のK先生の化学の授業を思い出しました。K先生は今もお元気で京都に住んでいるとお聞きしています。上の説明を要約すと、六角形が一番安定している形である。座り心地の良い形であるということになります。

## あっちゃんの夏休み(11)「だるまストーブ」

小学校時代、当時は普通にストーブと呼んでいました。「だるまストーブ」という呼び方があるのを知ったのは、かなり後の話です。

学校の前の杉林から小学生が茶色の杉葉を拾う「杉葉ひろい」が秋頃にあったと記憶しています。これは、石炭ストーブの火種に使われたのでしょう。落下してなくて、まだ木についている茶色の杉葉を、下に落ちている弓なりの枝を投げて落としていた、ターザンゴッコは、作業に遊びをいれていたことが伺われます。「アーアーアー」とでも言っていたのでしょうか。

石炭を教室まで運ぶ石炭係(日直がしていたかもしれません)が、朝、玄関左側にある石炭置き場から運んできます。そのバケツには石炭と古新聞、杉葉、マッチが入っていました。そして、古新聞紙に火をつけ、杉葉から石炭へと火が移っていきます。誰が火を着けたのでしょうか。防火の観点からは担任だと思いますが、記憶は定かではありません。当時は学校給食が始まっていたはずですが、弁当を持って行く日もありました。冬になると、その弁当をストーブの上で暖めていた風景とともにそのにおいが教室中に広まっていた記憶も蘇りました。あまりよいにおいではないと想像しますが・・・

※だるまストーブ⇒明治から昭和中後期に日本で使用された鑄鉄製の暖房器具。

※鑄物(いもの)⇒加熱して溶かした金属を型に流し込み、冷えて固まった後、型から取りだして作った金属製品。

